

## 6 - 1 南海トラフ（四国沖）沿いの地震活動（1967 - 1980）

### Seismic Activity along the Nankai Trough off Shikoku (1967 - 1980)

高知大学高知地震観測所

京都大学徳島地震観測所

Kochi Earthquake Observatory, Kochi University

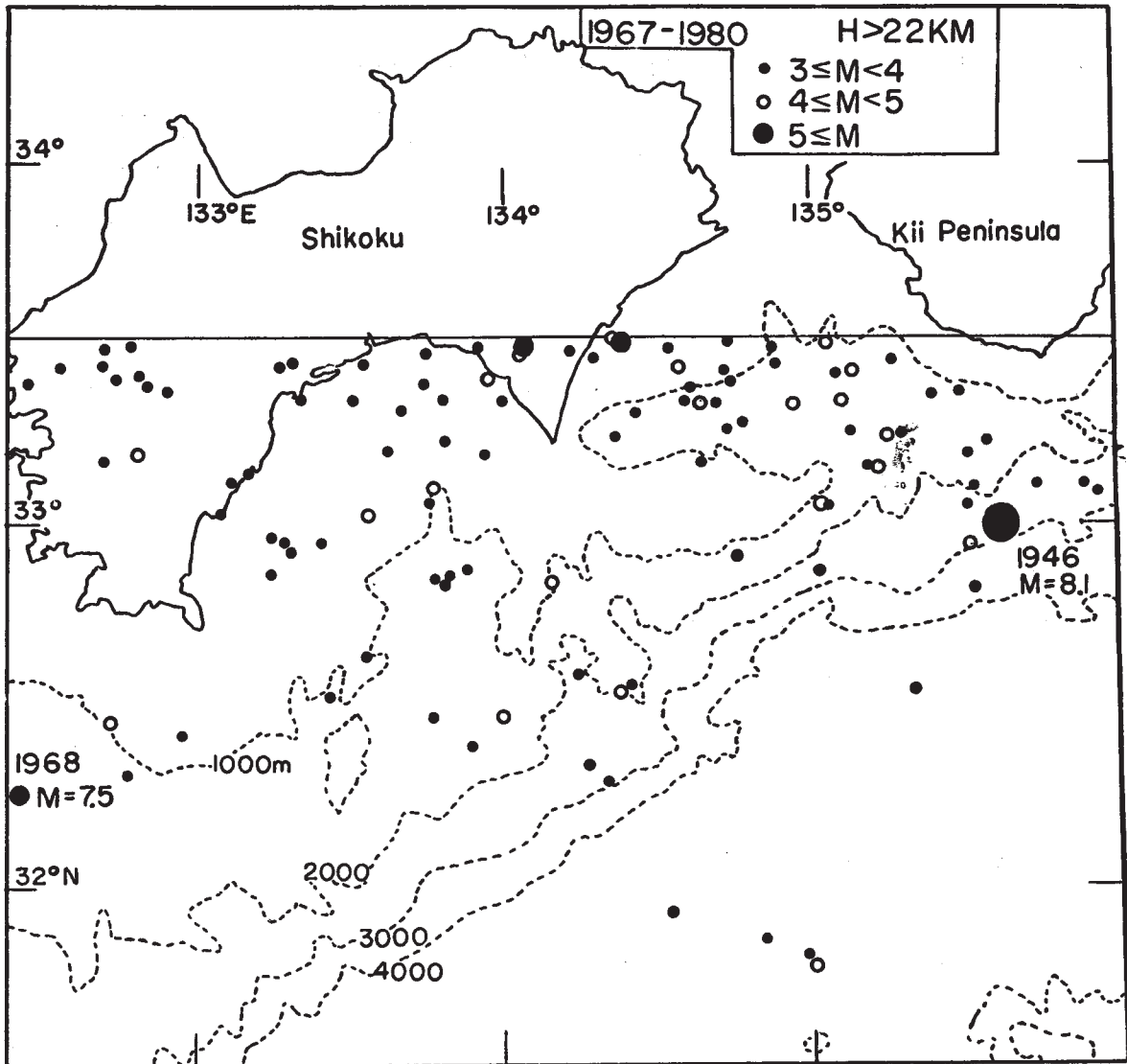
Tokushima Seismological Observatory, Kyoto University

1967年から高知大学が、1975年から京都大学（徳島地震観測所）が四国地方で微小地震の観測を始めた。以来1980年までの14年間に南海トラフ沿いに発生した地震がかなり観測されているので、比較的震央がよく求まった地震について震央分布を求め地震活動を検討する資料とした。震源の決定には両観測所の他に東京大学和歌山微小地震観測所のデータも利用させていただいた。

四国地方ではトラフがかなり陸地から離れていて、しかも観測点が陸地に偏在しているために陸地から離れるに従って震源決定の精度は落ちる。また上記期間において観測点の数に変化があったので均質な震央分布を示してはいないが大よその地震活動の特徴を知ることが出来る。

その特徴として、第1に、他の地域と同様にトラフより外（大洋）側の地域での地震発生は少ない。第2に、しかし皆無という訳ではなく、特に土佐湾はるか沖では活動が見られる。第3に、地震活動は一様でなく活動域が土佐湾沖と紀伊水道沖に分かれ、その間の室戸岬沖では活動が低い。

この地震活動の特徴から、トラフと地震活動との関係は密接であり、そして従来地震活動が極端に低く地震活動前線ともいうべき境界域が内陸深く入り込んでいると一般的に考えられている四国中・西部地域はそれ程活動が低くないことが分かる。また巨大地震の震源域の区分として考えられている西側からの区分領域のA、Bの境として室戸岬沖の低活動域を考えることが出来るかも知れない。



第1図 南海トラフ沿いの震央分布

Fig. 1 Epicenter distribution of earthquakes along the Nankai Trough.